

月刊 やちまなこ

2014.2.15 発行

No. 195

2 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



雪の少なかった湿原は先日の低気圧の影響で、雪原へと姿を変えてしまった。季節風に雪が舞い、ハンノキ林を通り抜けるたびビュービュー、ザーザーといった音が聞える。雪煙りの中で輝く太陽の光にわずかな春の兆しを感じるものの、北国の春はカレンダー通りにはならない。遠くにキタキツネの姿が見えた。まるで彷徨うように歩いてはギャンと鳴きながら、やがてハンノキ林の方向へと向かって行った。

コッタロ川と湿原のほとりから

164 2月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住・中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

三寒四温真っ只中、昼夜の気温の乱高下に眉の上げ下げも頻繁な昨今、“子別れの丹頂挑む猛吹雪”。このエリアで毎年営巣する丹頂3番のうち第2コツ&タロの18羽目の幼鳥は、昨年生まれ育った唯一の子鶴でしたが目出度く9日に卒業(自立)して行きホツとしております。思いもよらなかった暖気に見舞われた今季は少雪で、途切れがちのクロカンスキーも諦めかけていた本日(10日)、夜が明けるとまるで魔法の如きゲレンデ。『念ずれば通ず』で10cmをわずかに越す積雪は1月27日の9cm足らずの上に積み上がって、クロカンスキー本番にふさわしく、ウハウハの滑り出し。これ迄の不完全燃焼感もふっ切れそうな滑り心地ではありませんか。

一方、“如月の庭は野鳥の花盛り”で、7つ設えたエサ台には各々リンゴとみかん、脂身にヒマワリの種が盛り沢山。常連の四十、五十、ハシブト雀、シメは云うに及ばず、赤ゲラ7~8羽と鶇等食客達がひきもきらずの大盛況。その中で異色の赤ゲラ♀1羽は、何と鶇用リンゴに御執心。大口開いた瞬間をパチリ!不思議なのは、他の♂♀がリンゴに全く興味を示さないことです。

さて、これ迄庭池に日参して2ヶ月余りになる川蟬君は今や我家のアイドル的存在となって連日、楽しませてくれております。目のさめるようなコバルトブルーの背部に劣らず、濃いオレンジ色も鮮やかな腹部を見せてこちらを向き、鋭いまなこをキラリ。狙いを定めた魚に霧氷の枝からヒラリと舞降りる一瞬の迫力が伝わりますか否か……。

ところで、普段の殺風景なモノトーンの世界にも時折、ハッ!と息をのむ光景に出くわすことがあって、写真の赤ゲラが止まっている木立ちの向こうに浮かぶ白雲が棚引くブルースカイとのクラデーションには自然の神々の粋なはからいが感じられるのではないのでしょうか。



湿原の住人たち その155

ワタリガラス

カラスの仲間のワタリガラスは、一年を通して見られるハシブトガラスやハシボソガラスよりも大きく、この辺りでは、数は少ないですが秋から冬にだけ見られる冬鳥です。アイヌ語で老大なカラスを意味するオンネパシクルと呼ばれています。湿原の大空を舞うシルエットはまるでワシのようで、くさび形の尾が特徴的です。カラスにしてはちょっとサイズが大きめで、カポンカポンなど聞きなれない鳴き声でしたらゆっくり観察してみてください。



期間限定コースを歩いて冬の自然を楽しみました！(2/15)

本州の記録的な大雪をよそに、当地の天気はなんとかもちこたえ、曇天の中スノーシューを履いて冬の塘路湖畔散策を行うことができました。3月上旬には住人が戻ってくるアオサギコロニー付近や結氷した湖など期間限定コースで、冬ならではの自然を楽しみました。



☞巣の大きさと数に参加者が驚いたアオサギコロニー。

☞ケンケンパーの足跡をたどっていくと湖岸の柳に到着。いったい何匹いたの？と思うほど、エゾユキウサギの遺留品が。刃物で切ったような食痕や乾燥した糞が残されていました。

横浜と埼玉からの参加者は、結氷した湖を歩けることにとても感動していました。

ネムネムのつるいうろろ日記 Vol.47「贅沢な乗馬」

真冬の北海道で乗馬をしてみたいと、ウマ好きの友達が栃木県からやってきたので、鶴居村にある「どさんこ牧場」に行ってきました。

前々日までの大雪と打って変わって晴天。風もなく穏やかな天気の下、新雪をモフモフと道産子で進みます。乗馬コースの向かいにある牧草地では、木にオオワシが何羽も止まっています、時々私たちの頭上を横切っていきます。最高に贅沢な乗馬でした。

さて今回の乗馬は偶然、いつも仕事でお世話になっている環境省の方がご夫婦でいらっしゃっていて、一緒にレッスンを受けることになりました。このご夫婦、自然について学ぶ学校のご出身だそうで、私を含めたお客さん4人中3人が自然系の仕事の経験者というかなり特殊なメンバー。ガイド役の牧場の方も驚かれたでしょう。乗馬中、生き物が出てくれば、誰かが解説してくれるので、ガイドの多い（というか、私の友達以外ガイドしかいない）観察会状態。そういった意味でも大変贅沢な乗馬でした。

辻 ねむ（標茶町郷土館学芸員）

2がつ 11にち

ばしょ つるい

止まったとたん、ウマ達は雪の下にあるササを掘り出して食べ始めます。これぞ道草。



